



平成 28 年 7 月 13 日
株式会社海遊館 広報チーム
〒552-0022 大阪市港区海岸通 1
TEL06-6576-5529 FAX06-6576-5551
<http://www.kaiyukan.com/>
(担当：村上、西村、田中)

大型の企画展 7月15日スタート！

びっくりするほど“謎だらけ”！！ 企画展「デスモスチルスのいた地球 ～謎だらけの古代生物たち～」

大阪市港区の海遊館は、平成 28 年 7 月 15 日（金）から平成 29 年春まで、企画展「デスモスチルスのいた地球 ～謎だらけの古代生物たち～」を海遊館エントランスビル 4 階にて開催します。本企画展のテーマは、「生き物たちの“謎だらけ”の進化」。デジタルアトラクションや生きた化石と呼ばれる生き物との出会いにより、“謎だらけ”の進化の不思議と面白さを体感できる企画展です。



デスモスチルスのイメージイラスト
©新村龍也・足寄動物化石博物館



「デスモスチルスのいた地球」イメージ

企画展のタイトルにもなっている「デスモスチルス」は、日本で多数化石が確認され、100 年以上研究されているにも関わらず、未だにどんな姿で、どんな場所に住み、何を食べ、どうやって泳ぎ歩いていたか判明していない、謎の海の生き物です。本企画展では、「デスモスチルス」の“謎”に迫ると共に、海遊館でも人気のイルカやアシカの祖先たちの“謎”、ペンギンと他人の空似したと考えられているペンギンそっくりの絶滅生物「ペンギンモドキ」の“謎”などを紹介しながら、進化の不思議をたどります。

また、進化の謎を解き明かす重要な“生き証人”である貴重なシーラカンスの実物標本も展示します。

開催初日（7/15）開館前の「デスモスチルスのいた地球」撮影のお知らせ

メディア関係者の方は、9 時 30 分から展示室内を撮影していただけます。

撮影ご希望の場合は、事前に広報チームにご連絡ください。

※一般の入館者が企画展に到着するのは 10 時 45 分頃からです。

海遊館 広報チーム 06-6576-5529

【企画展「デスモスチルスのいた地球～謎だらけの古代生物たち～」】

◆開催概要

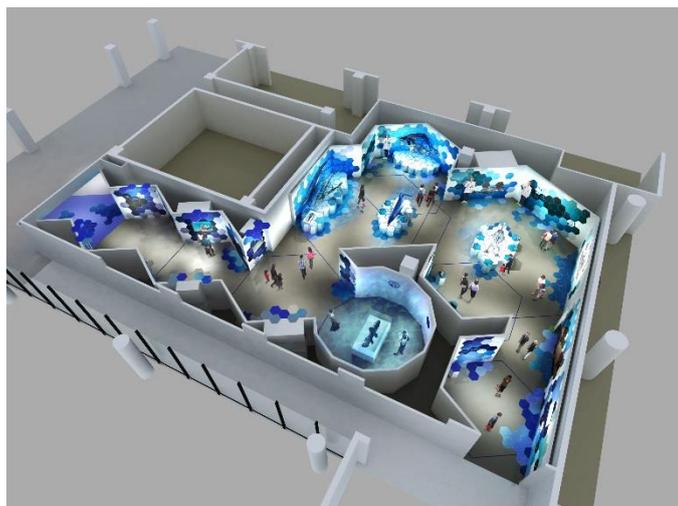
開催期間：平成 28 年 7 月 15 日（金）～平成 29 年春

時 間：海遊館営業時間と同じ

料 金：無料（海遊館入館料を含む）

場 所：海遊館エントランスビル 4F 新体感エリア内

内 容：「生き物たちの“謎だらけ”の進化」をテーマにした企画展。貴重な標本をはじめ、デジタルアトラクションや生きた化石と呼ばれる生き物の展示で、“謎だらけ”の進化の不思議と面白さを体感できます。



◆ゾーンとストーリー紹介

【1】今を生きる海の動物たち

生命の誕生は約 40 億年前。その後およそ 3 億 6000 万年前に、生活の場を海から陸上へ変える脊椎動物が現れました。そして人間の歴史は 700 万年とされています。これだけ見ても、あまりにも長い時を経て、生き物たちが進化してきたことがわかります。

今回の企画展で特に注目したのは海に棲む哺乳類の祖先や、古代海獣。海遊館の生き物たちの祖先は一体どんな姿だったのか、進化に思いを馳せるゾーンです。

主な展示物

<生体展示> マボヤ…進化の系譜上ヒトを含む脊椎動物の祖先に近い生き物

【2】進化・絶滅の生き証人 <海から陸へ移動していった生物たち>

進化の歴史から見ると、海で暮らしていた魚たちが陸に移動し、足を持つ生物が登場し始めました。この進化の中で登場したのがシーラカンスやハイギョです。

人間を含む四足動物の祖先は、シーラカンスとハイギョのどちらかと考えられています。どちらがより私たちの祖先に近いかという議論は 100 年以上続けられていますが、いまだ答えはでていません。また、彼らは当時からほとんど姿を変えておらず、まさに「進化・絶滅の生き証人」といえるでしょう。

主な展示物

<標本> シーラカンス…4 億年前の地層から出土したシーラカンスの化石と、現存種の体の形があまり変わらないことから、「生きた化石」と呼ばれる魚。展示するのは、フランスのシャルル・ド・ゴール大統領から贈られて 1967 年 2 月に日本に初めてやってきたシーラカンスの標本。※最終ページに補足情報有り。

<生体>プロトプテルス エチオピクス…「ハイギョ（肺魚）」とも呼ばれる。その名の通り、エラ呼吸ではなく肺呼吸を行う。シーラカンスと同じ肉鱗類。

<生体>メキシコサラマンダー…「ウーパールーパー」という呼び名で有名になった両生類。



シーラカンスの標本（イメージ）



メキシコサラマンダー（ウーパールーパー）

【3】海獣の進化 <海から陸へ、そしてまた海へと移動していった生物たち>

魚が陸に上がって進化し、その一部はまた海へ戻るという道を選びました。最初に海へ戻り始めたのはクジラの祖先です。「パキケタス」のような初期のクジラは、しっかりとした後ろあしを持っていて、陸上を歩くこともできました。その後、半水棲の暮らしから、完全に水中生活のみを行うようになり、長い進化の末、現在のイルカやクジラのような姿になっていきます。このゾーンでは、イルカやアシカ・アザラシの祖先である古代生物を紹介しています。

主な展示物

<標本>

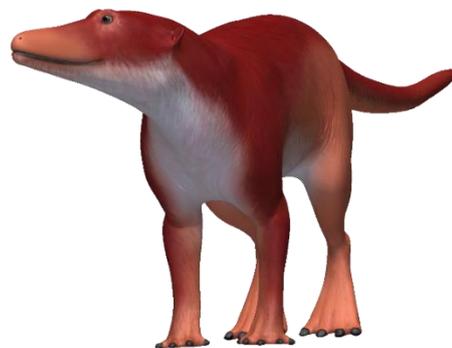
アショロカズハヒゲクジラ・アロデスムスの骨格標本



アショロカズハヒゲクジラ
(クジラの祖先)



アロデスムス
(アザラシの祖先)



パキケタス
(クジラやイルカの祖先)

【4】謎が多い生きもの



デスモスチルスのイメージイラスト
©新村龍也・足寄動物化石博物館

3000～1000 万年前の地層から出てきた、日本での化石発掘例も多いデスモスチルス。発見されて 100 年以上経ちますが、その生体や進化についてはわからないことだらけで、いまだに研究者たちを惑わせています。展示では、何がわかっている、何がわかっていないのか、そしてどんな説が唱えられているのか、デスモスチルスの「謎」をほんの少し紐解きます。また、「謎」を楽しく感じられるデジタルアトラクション設置。その他、ペンギンモドキやステラーカイギュウの謎も紹介します。

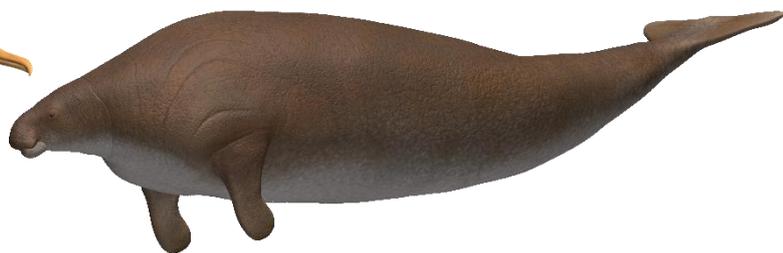
主な展示物

<デジタルアトラクション>デスモスっち…謎の古代海獣デスモスチルスのデザインに挑戦！タブレットで、目や、体の模様を選び、オリジナルのデスモスチルスを完成させると、古代の世界にデスモスチルスが登場します。自分オリジナルのデスモスチルスは、生き延びて進化するのでしょうか？
<標本>デスモスチルスの骨格標本



ペンギンモドキ

(ペンギンそっくりに進化した、ウヤカツオドリの仲間である古代生物。※ただし、ペンギンの仲間だと考える説もある。)



ステラーカイギュウ

(海牛類。食用として人間が食べ尽くした事が原因で、発見されてからわずか 27 年で絶滅した)

【5】かわったカタチ

水の中で生活する哺乳類に比べ、同じ水中でも魚たちの体のカタチは様々です。不思議なカタチに進化した魚たちを紹介します。

主な展示物

<生体>エレファントノーズフィッシュ：くちさきが長く突き出ている象の鼻に見えることからこの名前がついた。

<生体>バタフライフィッシュ：蝶が羽を広げるように泳ぐ姿からこの名前がついた。浮袋を使って空気呼吸ができる。



バタフライフィッシュ

【海遊館からのメッセージ】

デスモスチルスが生きていたら、彼らはどんな生き方をしていたのでしょうか？

今の地球には長い歴史をかけて進化してきた、多種多様な生き物が暮らしています。

そして、たくさんの種が地球上から消えているとも言われています。

生き物たちの進化を知ることで、今できること、私たちにできることを考えるきっかけにしたいと考えています。

【監修・協力】

【監修】足寄動物化石博物館 澤村寛氏、大阪市立自然史博物館 林昭次氏 樽野博幸氏

【学術協力】足寄動物化石博物館 安藤達郎氏 新村達也氏、株式会社よみうりランド、群馬県立自然史博物館 木村敏之氏 高栞祐司氏、国立科学博物館 甲能直樹氏、札幌市博物館活動センター 古沢仁氏、産業技術総合研究所地質標本館 兼子尚知氏、下関市立しものせき水族館、沼田町化石館 田中嘉寛氏

【写真協力】大阪市天王寺動物公園事務所、鳥羽水族館、大谷誠司氏、NIFREL、小樽水族館、紋別市オホーツクとっかりセンター、太地町くじらの博物館 【映像協力】ふくしま海洋科学館

(五十音順)

※本リリースにおけるすべての古代生物のイメージイラスト ©新村龍也・足寄動物化石博物館

<資料>

◆日本で最初のシーラカンス標本



このシーラカンスは、1966年12月にコモロ諸島で捕獲され、1967年にフランスから贈られました。標本作成当時の測定で、体長156cm、体重55kgとされています。

日本で最初の非常に貴重な標本は、当時、東京大学の末広博士、国立科学博物館の岡田館長らによって解剖研究が行われ、日本におけるシーラカンス研究の礎となりました。その後、1967年3月より、よみうりランド海水水族館（当時）で日本で初めて一般公開され大きなニュースになりました。2003年からは、下関市立しものせき水族館「海響館」で紹介され、2016年7月15日より海遊館で展示します。



シーラカンスのヒレは、根元が柄のようになっており、一般的な魚とは異なります。この柄の部分には骨があり、陸上で暮らす四足動物の前足と同じ起源と考えられており、「進化」の不思議を感じさせます。